

増補 小笠原 登

ハンセン病強制隔離に抗した生涯



本書は、二〇一九年十二月に小笠原登氏の五十回忌法要（吐鳳忌）が勤まることを機縁として、二〇〇三年十一月に発刊された『真宗ブックレット No.10 小笠原登 ハンセン病強制隔離に抗した生涯』に、「国に勝つ」（玉光順正氏）、「生まれ育った故郷 甚目寺 圓周寺」（小笠原英司氏）、「人間、小笠原登を知る 新しく発見された資料から」（藏座江美氏）の三名の寄稿を加え、また「小笠原登年譜」を更新し、増補版として発刊したものになります。

なお、増補版の発行に際し、今回寄稿いただいたもの以外の原稿は初版のままを原則としましたが、解放運動推進本部編集のもと、肩書など若干の語句の修正を行いました。

【凡例】

本文中はハンセン病という表記を用いましたが、引用文並びに「癩学会」「癩菌」などの固有名詞については、歴史事実を表す用語としてそのまま表記しています。いかなる差別も許されることはなく、その克服が本書の願いです。
 ・本文中の真宗聖典とは、東本願寺出版発行の『真宗聖典』を指します。

小笠原登と大谷派	玉光順正	2
小笠原登の生涯と思想	菱木政晴	10
小笠原登の医療思想	和泉眞藏	24
大谷派光明会の設立とその役割	山内小夜子	36
「ハンセン病（らい）」と天皇制		
小笠原登先生の思い出	大谷藤郎	54
国に勝つ		
小笠原登と大谷藤郎	玉光順正	64
小笠原登を育んだ人たち	河野武志	75
祖父啓實と兄秀實		

小笠原登の生まれ育った故郷	甚目寺 圓周寺 小笠原英司	82
人間、小笠原登を知る		
新しく発見された資料から	藏座 江美	90
インタビュー小笠原登先生の診察を受けて		105
あとがき		134
資料		139
小笠原登年譜		
小笠原登著作文献目録		
論文・癩に関する三つの迷信	小笠原登	105

増補

小笠原登

ハンセン病強制隔離に抗した生涯

No. 14

SHINSHU BOOKLET

小笠原登 と 大谷派

たまみつじゆんしょう
玉光順正

一九四一（昭和十六）年二月、中外日報は、真宗大谷派圓周寺（名古屋教区）の出身であることを明確にしつつ、小笠原登氏の「癩は不治でない」という記事を掲載した。そしてその記事はその後、長島愛生園医官早田皓氏の反論「癩の遺伝説と治療の限界に就て」、そしてまたその反論ともいべき小笠原登氏の「我が診療室より見たる癩」、そしてまた早田皓氏の「癩は伝染病なり」と続いた。いわば仏教界の業界紙ともいべき中外日報においてハンセン病に関する論争が続いたのである。そしてその論争は、日米開戦の三週間前に開かれた第十五回日本癩学会（一九四一年十一月十四～十六日）へと続くのである。

中外日報紙上で続いた論争にもかかわらず、大谷派光明会を結成して救癩事業をつづけていたはずのわが大谷派から、その論争に意見を表明したこともなければ、機関誌である『真宗』誌上においても何らそのことについての言及はない。大谷派出身を名告られる小笠原登氏をいわば全く無視し続けたわけである。

小笠原登氏に対する無視は、大谷派が国立療養所長島愛生園開園（一九三〇年）前後から突如始まった『真宗』誌上でのハンセン病に関するキャンペーン当初から続いていたことである。

小笠原登氏は既にそのキャンペーンが始まった時「癩に関する三つの迷信」（一九三一年）を発表され、国策としての隔離政策等に異をと覚えておられたのである。

小笠原登氏が大谷派の出版物に登場するのは、一九九〇年発行の真宗ブックレットNo.1『ハンセン病と真宗』を待たねばならないのである。

一体何故そんなことになったのだろうか。そこに大谷派とハンセン病との、また国家との関係が読みとれるといえるだろう。

小笠原登氏のハンセン病に関する学説が、日本社会の中でも大きな話題になっていたその時、一九四一（昭和十六）年七月『真宗』誌では愛生園医師内田守人氏の「無

癩常会の提唱と信徒への期待」という文章が発表されている。それは宗門外の人の手によるものの、いわば小笠原学説に対しての大谷派としての見解表明ともいえるかもしれない。

その中見出しを抜き出してみよう。「癩は遺伝に非ず伝染なり」「癩患者の数は何の位か」「本邦の療養所の状況は」「皇室の御仁慈と国民運動」「救癩国策の転換期」「日本の癩は果して減少しつつありや」「無癩常会の提唱」「癩は何の程度に治癒するか」となっている。

これらの項目、そしてその内容は、小笠原学説を意識しつつ、同時に国策としての隔離政策の強調を示しているといっていだろう。

そしてそれも、これら一連の小笠原登氏と療養所学派といわれる人々の論争の中で明らかかなことは、それが「純学問的討論であることを初頭に於て御断り」(中外日報一九四一年五月二十一日版早田皓)といいながら、あまり学問的とはいえない内容に終始しているといわねばならないだろう。

それは、医学上でいえば純学問的には、小笠原登氏と療養所学派との間に特別な違いがあるわけではないからである。小笠原登氏もハンセン病が遺伝であるなどというのは迷信だとはっきりいわれていることはいうまでもない。ただそこに伝染しやすい時、その対応は全く違ったものになるわけである。

つまり、これらのことは、いわば学説としてはそんなに違いがない以上、それはその人その人の生き方の問題ともいえるだろう。それは、このブックレットでの他の論文でも明らかのように、小笠原登氏は「病気よりも病人を大事にした」といえるだろうし、逆に療養所学派と呼ばれる人たちは「病人よりも病気を大事にした」といえるのではないだろうか。そのことを見事に表現しているのが、小笠原登氏の「鐘と撞木の譬え」(大谷藤郎氏稿「小笠原登先生の思い出」60頁参照)である。

そしてもう一つある。それはこの間の論争の中で、小笠原登氏が一切ふれていないところ、そして逆に療養所学派の人たちが強調したところ、それは前述の中見出しでいえば「皇室の御仁慈と国民運動」そして「救癩国策の転換期」などといわれる部分である。

内田氏の文章では「大谷派東本願寺に於ても昭和六年以来、此の陛下の御仁慈を奉戴して、『大谷派光明会』を結成し救癩運動に乗り出され」と述べられ、また「癩療

※世をいとう

真宗聖典562、563、567頁

※世のいのりにこころいれて

同568頁

※光田健輔

1876年、山口県に生まれた。1914年、全生病院長となり、1931年、国立長島愛生園開設に伴い初代園長として転出。患者の隔離収容を推進、その影響は大なるものがあつた。1951年に文化勲章を受賞。1964年没。16頁参照。

養所の患者達は祖国を浄化する為に、療養所内に安住し、此処に骨を埋むる事をいさぎよしとしているのである」等と述べられているのである。まさに癩撲滅、祖国浄化というスローガン通りのが述べられ、それにそつた大谷派の取り組みも行われていたといわざるを得ないだろうし、事実、大谷派光明会もそのことをこそ何よりも大事にしたといえるのである。

だからこそ、大谷派と小笠原登氏との接点はなかつたといえるのかもしれない。

つまり、大谷派としてのハンセン病問題に対する取り組みは、最初が当時（一九三〇（昭和五）年十二月）の安達謙蔵内務大臣の協力依頼であつたことが象徴するよう
に、あくまで国策としてのハンセン病対策ということが中心であつたといえるだろう。

そこでは、国策に異をとねえる小笠原登氏が登場することは、たとえそれが大谷派の出身であつたとしても、不可能だつたということであろう。

そのような背景があるが故に、その後、日米開戦ということの中で、大谷派のハンセン病問題への取り組み、大谷派光明会の動きは戦争協力ということの中で消えてしまつていくのである。

そしてそれらのことがまた、ハンセン病を病む人たちに、その家族の方たちに、病

はもちろん、病とは別のもう一つの苦しみをもたらすことを続けさせてしまふことになつていったといえるだろう。

さて、最後にそれらのことを現在の問題として考えなければならぬことがある。

周知のように、大谷派では「らい予防法」廃止にあわせて、一九九六年四月、謝罪声明と国家に対する要望書を出した。謝罪声明では「一九三二年、真宗大谷派は「らい予防法」の成立にあわせ、教団を挙げて「大谷派光明会」を発足させました。当時から隔離の必要がないことを主張した小笠原登博士のような医学者の存在を見ず、声を聞くこともないままに、隔離を主張する当時の「権威」であつた光田健輔博士らの意見のみを根拠に、無批判に国家政策に追従し、「隔離」という政策徹底に大きな役目を担つていきました」と述べている。

そこには小笠原登氏と光田健輔氏の名前が象徴的に並べられているわけであるが、そこに私たちの教団、真宗大谷派が持つていた国家との関係が見事に表出されているといえるだろう。

親鸞は「世をいとう」といい「世のいのりにこころいれて」という。これらの言葉も誠に象徴的としかいえないが、今、私たちはこれらの言葉の持つ意味を実践的に表